

## ■ 動詞活用表全まとめ

声に出して覚えよう！！

ラ変	ナ変	サ変	カ変	下二	上二	下一	上一	四	
ら	な	せ	こ	e	i	e	i	a	未
り	に	し	き	e	i	e	i	i	用
り	ぬ	す	く	u	u	eる	iる	u	終
る	ぬる	する	くる	uる	uる	eる	iる	u	体
れ	ぬれ	すれ	くれ	uれ	uれ	eれ	iれ	e	已
れ	ね	せよ	こ・こよ	eよ	iよ	eよ	iよ	e	命

□ 「大江山」本文解説②

これは **力** まかせての理運のこと **なれ**  
このことは普通の当然の結果である

か。**や。** 疑問

**ども** 逆接  
**かの卿の心には、これほどの歌、**  
**けれども、あの(定頼)卿の中では、これほどの和歌を、すぐさか**  
**四止**

**いま詠み出だす** 可用  
**べし** **とは、** **知られ** **かりける** **に**  
**詠み出だす** できると、お気づきにならなかつたのである  
**ラ・未作** 尊未消 敬未消  
**四・未** 定用過去体  
**定** 断定已

□ 「大江山」本文解説③

「大江山」本文解説①

**歌意**　【第四台と第五台は倒置法】  
大江山から生野を通つて行く野の道が遠いので、まだ天  
の橋立の地を踏んでみたこともありませんし、母からの  
手紙も見ていません。

◆ 「大江山」の歌（百人一首90頁）

大江山

まだふみも見す 天の橋立 いくのの道の 遠ければ 行く野生

【掛詞】 【掛詞】 主格

【踏み文】

【四句切れ】

打消止 体言止め

◆ 第四切と第五切は割り置法

第四句と第五句は倒置法

これは **月はかせ** ての理運のことなれ  
このことは普通の当然の結果である

逆接 サ下用 断定已

ども、かの卿の心には、これほどの歌、たゞ  
けれども、あの(定頼)卿の中では、これほどの和歌を、すぐさま  
サ四止 可能 用  
詠み出だすことができるのは、お気づきにならなかつたのである  
ラ・未作 尊敬 未消去 定用過体定  
知られたりけるに

これは**力もまかせて**の理運  
このことは普通の当然の結果である  
**ども、かの卿の心には、こ**  
けれども、あの(定頼)卿の中では、こ  
**いま詠み出だす**  
詠み出だすことができるとは、お気づき  
**べし**とは、  
可・能用  
サ・止  
逆接  
か。**や。**  
疑問

これは**力もまかせて**の理運  
このことは普通の当然の結果である  
**ども、かの卿の心には、こ**  
けれども、あの(定頼)卿の中では、こ  
**いま詠み出だす**  
詠み出だすことができるとは、お気づき  
**べし**とは、  
可・能用  
サ・止  
逆接  
か。**や。**  
疑問



## ■ 「買履忘度」本文解説①

鄭人有且買履者。

先自度其足而置之其坐。

至之市而忘操之。

已得履乃曰、「吾忘持度。」

鄭人に且に履を買はんとする者有り。  
鄭の人に履き物を買おうとする者がいた。

先ず自ら其の足を度りて之を其の坐に置く。  
まず自分で自分の足の寸法を測つて之をその座席においた。

市に之くに至りて之を操るを忘る。  
市に行く時になつて、これを手に持つのを忘れた。

已に履を得て乃ち曰はく、  
すでに履き物を手にしてそこで言うことには、

「吾度を持つことを忘る。」と。

「私は寸法書きを持つてることを忘れた。」と。

反り帰りて之を取る。反るに及びて市罷む。  
引き返して家に帰りこれをとつてきた。戻ってきた時には市は終わつてしまつていた。

遂に履を得ず。  
結局履物を手に入ることはできなかつた。

人曰はく、「何ぞ之を試みるに足を以てせざ  
人が言ふことには、「どうして自分の足で履物を試さないのか。」と。  
る。」と。

曰はく、「寧ろ度を信ずるも自ら信ずる無き  
言ふことには、「寸法書きを信じるのはよいが、自分自身を  
信じることはできないのだ。」と。

## ■ 「買履忘度」本文まとめ

### 再読文字【且(将) A。】

且ニA(セ)ントす「今にもAしようとする」

### 否定【不 A。】

A(セ)ザ「Aしない」

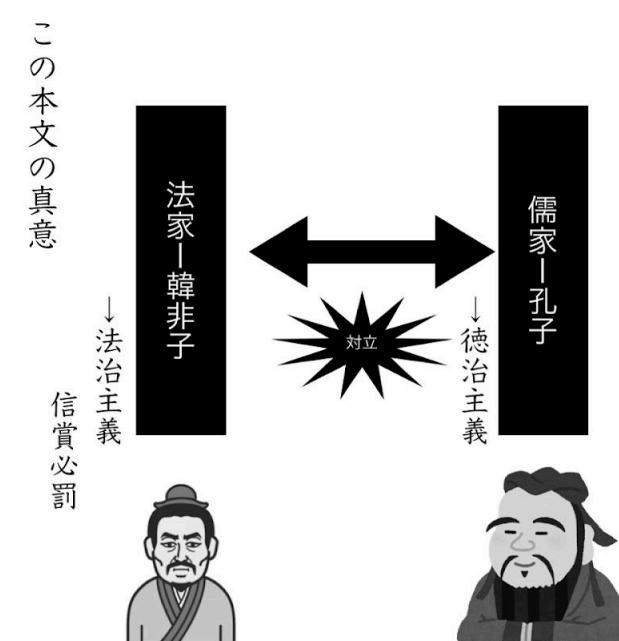
### 疑問【何 不 A。】

何ゾA(セ)ザル「どうしてAしないのか」

選択【寧 A 無 B。】

寧口A(スル)モB(スル・スルコト)無シ

「Aする方がよく、Bすることはない。」



## ■ 「買履忘度」本文解説②

反帰取之。及反市罷。

遂不得履。

人曰、「何不試之以足。」  
曰、「寧信度無自信也。」

↓度を信じ自分を信じようとしなかつたから  
度(書物)を信じ、自分自身(現実)を信じない  
主人公の行動は儒家の書物を重んじる心から  
くる。